

【研修報告】

Wisdom of the 6th Congress of European Union Geriatric Medicine Society, Dublin, Ireland : Late Life Creativity

宇野久光*

はじめに

The Irish Gerontological Society (IGS) は1950年に創設され、世界で最も歴史ある老年医学会の一つである。この学会の特徴は、医師や看護師のみならず、agingに関与している人々が幅広く参加している“multidisciplinary” membershipが特徴であるようだ。

今回参加したThe European Union Geriatric Medicine Society (EUGMS) は歴史が新しく、2001年に第一回の会議がパリで開催されている。今回が第六回目の会議の開催である。EUGMSの設立理由としては、EU各国における高齢者人口およびそれに付随した疾患の増加に対する危機感と、そのような大きな問題にはEU全体で対応しようという動きがあったようである。EUGMSのMissionは、一言で言えば、単に医学・医療だけの問題としてとられるのではなく、政治を巻き込んだ社会制度全体の問題として、老年医学に関する運動を展開していこうというように思える。

さて、わが国を振り返ってみると、世界一の長高齢者社会であるにもかかわらず、その対策は高齢者の保健福祉から始まって雇用まで、様々の分野で後手に回っている感があるのは否めない。社会全体に、高齢者を受け入れそれを活用するシステムが構築されていないように思える。

開会式その他

学会会場のConvention Center Dublin (CCD) は、多くの歴史的建物を残している街であるDublin市には少し不釣り合いな感じがする現代風の建物であった(図1)。建物は市の中央を流れているLiffey川に面した正面が全てガラス張りで、一階から最上階まで吹き抜けになっており、川岸と河口の街の風景を楽しめるようになっていた。



図1. ダブリン市の中心を流れるLiffey川の河口近くある学会場のConvention Center Dublin (CCD)。

Opening addressは、IGS会長のDesomond O'Neill教授が行なった。同会長の話はなかなか興味深かった。私は今までageism(年齢差別)という言葉になじみがなかったが、ヨーロッパでは、加齢による社会的な区別は偏見とみなされ、これを排除し正しいDemographic Dividend—ここでは各年齢層特に高齢者層における社会的配当—を実現しなければならないと説いた。

さらに氏は、加齢とDemographic DividendのMetaphors(隠喩, 象徴)としてLate Life Creativity, ということについて述べ、絵画、音楽、映画、詩の世界などの芸術家の中で、年齢を重ねても素晴らしい芸術活動を示した人々を上げた。その中でも特に葛飾北斎を取り上げた。北斎は74歳のときに「富嶽百景」を完成させたが、そのあとがきに書いた文章、「・・・70歳までに描いたものには、ろくな絵はない。73歳になってどうやら、鳥やけだものや、虫や魚の本当の形とか、草木の生きている姿とかが分かってきた。だから80歳になるとずっと進歩し、90歳

*日本赤十字広島看護大学 専門基礎 uno@jrchn.ac.jp

になったらいっそう奥まで見極めることができ、100歳になれば思い通りに描けるだろうし、110歳になったらどんなものも生きているように描けるようになる。」の英訳を、北斎の各年齢に描いた絵をスライドで紹介し、彼の絵画における創造的な情熱を説明した(図2)。会場からは感嘆の声が上がった。

Jean-Pierre Michel氏は、EUGMSの立ち上げ人の一人であるようであったが、氏は現在のEUが高齢化社会になっている現状と未来予測を概説した。EUの人口の高齢化傾向について、①現在EU全体で16%が65歳以上であるが2030年にはこれが25%になること、②Alzheimer病だけでも600万人が罹患しており、65歳から5年高齢化するごとに罹患者は倍増していること、③これらのケアのコストがEU全体で72億ユーロであり、2020年にはこれが倍増するであろうこと、などをのべ、Alzheimer病を代表とする神経変性疾患の医療は急務であることを力説した。これらの問題に対応するべく、EU各国で疾患ごとに研究を振り分け、人と資金を集中的に使うことを提案した。また、EU全体の老年医学の発達に資するべく、本年自ら編集主幹になり、European Geriatric Medicineを発刊された。その第1号の巻頭論文は、氏が共著者となっている“Worldwide decline in the oldest old support ratio”という論文で、世界的に85歳以上の面倒を見る50~70歳の人口が減ってきており、2050年まで減少の一途を辿るというものであった。

“Aging, Global Health and Human Rights”という題で講演したMary Robinson氏は、Founder/President of Realizing Rightsの肩書きであったが、

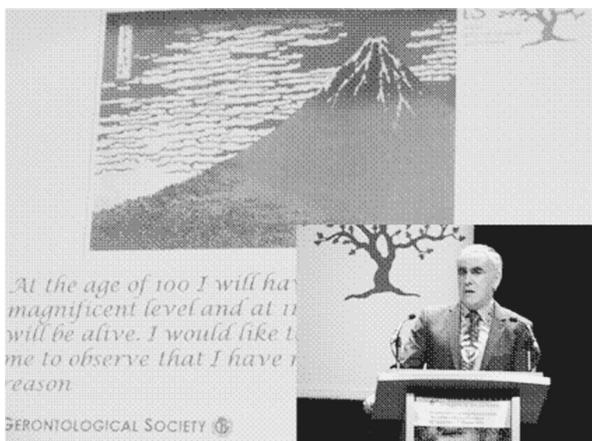


図2. 今回のEUGMS会長でIRSの会長であるO'Neill氏は、葛飾北斎の例を上げてLate Life Creativityを説いた。

後で調べてみると、第7代のアイルランドの大統領でかつ初の女性大統領であった。その後国際連合人権高等弁務官United Nations High Commissioner for Human Rightsとして活躍された方であるようだ。格調高い講演で、アフリカにおける人権擁護や医療援助、男女差別問題などとagingの問題を同じhuman rightsで捕らえているところが興味深かった(図3)。



図3. 初の女性大統領であった元アイルランド大統領のMary Robinson氏。現在は人権擁護NPOの会長。

Seamus Heaney氏の講演など

今回の会議で多くの講演、演題があったが、その白眉はなんといってもSeamus Heaney氏の講演であろう。大会場は満員となっていた。Heaney氏は1939年に北アイルランドの農家生まれた。奇しくもこの年は、W.B.Yeatsが没した年である。氏は1965年に“Death of a Naturalist”という処女詩集を出し教員をしていた。さらにHarvard大学やOxford大学に勤め、いくつかの詩集を出版し、1995年ノーベル文学賞を受賞し、「北アイルランドの詩人」から「世界の詩人」になった。同氏は2006年に脳卒中を罹患し、その後レハビリテーションをされ、今日に至っているとのことである。現在ダブリン在住であるようだ。

見たところ、壇上への昇り降り不自由はなさそうであった。氏は、子供たちに闘病中エネルギーをおおいに貰ったことを話した。Heaney氏は、加齢についてのW.B.Yeatsの詩やT.S.Eliotの文章について述べ、さらに自らの詩集から選んだいくつかの詩を吟じた。広い会場は水を打ったように静かになり、皆詩の朗読に聞き入っていた(図4)。どのくらい静かかといえば、私の電子カメラのシャッター音が

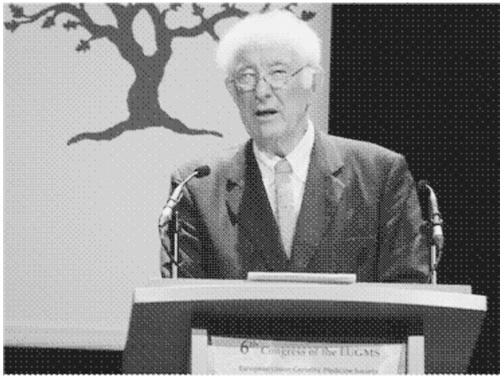


図4. 詩を朗読するノーベル賞受賞者の Seamus Heaney氏。

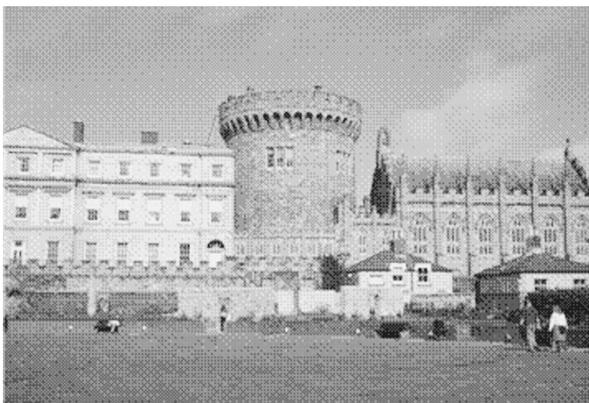


図5. Welcome Partyが開催されたDublin城。

やかましいといって、斜め前の席の参加者からとがめられる位であった。

学会初日には、アイルランド保険省の大臣主催による市内のDublin城でのWelcome Partyに招待された(図5)。Dublin城はダブリンの歴史の中心である。ここは10世紀頃ヴァイキングの砦であったところで、古アイルランド語のゲール語でDubb Linnはblack poolの意で、現在も地下室に水溜りがあるそうである。その後ノルマン人に征服され、以後700年に及ぶイギリスのアイルランド統治の中心地で歴代総督府であった。この城の大広間State Apartmentsは、17~19世紀に作られたもので、現在も大統領就任式や国の重要な式典の際に使用されている。Welcome Partyはこの部屋で行なわれ、豪華で高貴な気分を味わうことができた。なお、Dubulin城は第一次世界大戦では赤十字病院として使われたという。

学会発表について

学会発表は、通常の学会のように、Cardiology, Bone/Muscle/Rheumatology, Gastroenterology, Kidney diseaseなどなど疾患臓器別にセッションが

分けられていたが、Dementia, Stroke, Incontinence, Educationなどはこの種の学会に特徴的なものであった。

私の発表セッションはHealth Service Researchであり、発表演題は、“Anemia in The Elderly was An Indicator of Comorbidity : Comparison of The Prevalence of Anemia among Elderly Groups” というもので、高齢者における貧血の多施設調査を行なったものである。高齢者の貧血は単なる生理的な現象ではなく、多彩な基礎疾患を反映したものであることを主張したものである。高齢者の貧血はわが国だけでなく、欧米の著名な血液学の教科書にも、特定の血液疾患によるものを除けば、老人性貧血として特に問題としていないという傾向が従来は見られた。

同じセッションで、スペインのバルセロナの研究グループが、“Anemia in elderly hospitalized patients : clinical features, functional status and outcome one year after discharge” という発表を行い、高齢者の入院患者での貧血有病率は65%にもほり、貧血を有する患者ではADLが悪いことを報告した。これは私の発表の、老健入所者と人間のドック受診者では貧血頻度が大いに異なるという結果と部分的に一致するものであった。

最近、高齢者の貧血はその臨床的意義が再評価されてきている。昨年Leiden大学の研究者らは、高齢者においては、貧血は並存症とは独立した死亡の危険因子であることが報告した。また、心疾患、腎疾患、貧血は相互に影響を及ぼしあう疾患予後因子であることが明らかになり、イスラエルの研究グループが心腎貧血症候群cardio-renal- anemia syndromeという概念を提唱してきている。

終わりに

老年医学とは、医学医療のみならず、社会全体を巻き込んだ幅広い学問であると同時に社会運動でもある。その畢竟目的とするところは、個人としての幸福なagingであろう。そのような理想的な心境の一つとして、Heaney氏が選んだW.B. Yeatsの“The Coming of Wisdom with Time”という詩がある。

Though leaves are many, the root is one;
Through all the lying days of my youth
I swayed my leaves and flowers in the sun;
Now I may wither into the truth.
(W.B. Yeats, Poems selected by SEAMUS HEANEY)

できれば、晩年はかくありたいものである。

文 献

- den Elzen WP, Willems JM, Westendorp RGJ, de Craen JM, Assendelft WJJ, Gussekloo J (2009). Effect of anemia and comorbidity on functional status and mortality in old age : results from the Leiden 85-plus study. CMAJ, 181, 151-157.
- European Geriatric Medicine (2010). 1S, S1-S172.
- Irish Aging Studies Review(2010).4(1), p1-p112.
- SEMUS HEANEY(2009). W, B.YEATES Poems selected by SEMUS HEANEY, London, Faber and Faber Ltd.
- Silverberg D, Wexler D, Blum M, Wollman Y, Iaina A (2003) . The cardio-renal anemia syndroeme : does it exit?. Nephrol Dial Trans plant 18(suppl 8), viii7-viii12.
- 宇野久光 (2010). 高齢者の貧血有病率の検討.日本老年医学会雑誌, 47 (3), 243 - 249.